

昔々、犬と猫を飼っている老人がいた。彼は 2 匹とも可愛がっていたが、犬の方をより一層可愛がっていた。猫は、犬が世話されるのを見ることに耐えられなかった。老人は犬を風呂に入れてやり、餌を与えたが、猫はココヤシの実を出され、食べたり食べなかつたりだった。

老人は金を箱にしまっていたが、或る日泥棒が箱を盗んだ。老人は盗まれたことを確かめてから、犬に起こったことを見たかどうかを尋ねたが、犬は見えていないと答えた。彼は猫にも尋ねたが同じ答えだった。彼は少し考えてから言った。

「何とかして泥棒を見つけなくてはいけない。そうでないと、お前たちを飼うことは出来なくなるだろう。というのも、お前たちを養うための金がないからだ。自分たちそれぞれがこれからそうなるのだ」。

猫は、泥棒を探しに行くことに同意し、犬もまた同じだった。

彼らは 3 人で泥棒を探しに出かけた。老人は泥棒を効率よく見つけるために、別々の道を進む方がいいと考えた。彼はひとつの方向に進み、2 匹の動物は違う方向に進んだ。犬と猫は一軒の家を見つけ、人が住んでいることがわかった。猫はすぐに入ろうとしたが、犬が猫を止めて言った。「待つて、家の住人が誰かを見よう。それから君が入って、中に箱があるかどうかを確かめられるだろう。もし住人が中にいたら僕がそいつの後をつけるし、君が箱を取り戻せばいい。僕たち 2 匹では泥棒相手に戦うのは無理だからね」。

猫が入り、部屋まで行って箱を見つけた。猫は犬を呼んだが、すごい勢いで入ってきたので、泥棒は逃げだした。彼らは箱を運んで行ったが、もと来た道を見つけられなかった。彼らは川に行き着き、猫が叫んだ。

「なんてことだ。僕は死んでしまう」。

「なぜだい？」。

「かあさんには泳ぐことを教える時間がなかったんだ。この川を渡るのは無理だ」。

「どうすればいいだろう」。

「泳げない上に、僕は濡れるのも駄目なんだ。どうしたらいいかわからない」。

「僕が全部やる。君を運べば濡れないですむだろう」。

犬は猫と箱を運び、川の向こう岸まで渡りきった。犬は岸で水気を払うために体を振ったが、猫はその隙に箱を取った。猫は彼らの住まいが見えるところまで走った。彼は老人に言った。

「ほら、箱を見つけましたよ」。

「犬はどこにおるんだ」。

「どこか知りません。僕は向こうの方に行ったので犬は見えていません」。

犬がたどり着いたので、老人が尋ねた。

「どこにおったんだ？」。

「僕は猫と一緒にいて、それから猫が走って箱を取ったのです。僕が猫を川の端から端まで運んだのです」。

老人は猫を呼んだ。

「お前は犬と一緒にではなかったと私に言わなかったか？」。

「僕は犬と一緒にはいませんでした」。

「どんな証拠があるんだ？」。

「見て下さい。あいつはびしょびしょですが僕は全然濡れていません。僕は犬とはいなかったんです。どこかで雨が降ったにしても、僕は犬と一緒にではなかったです。犬が川を渡ったとしても、僕は犬と一緒に渡ってはいません」。

犬が言った「僕は猫を自分の背中に乗せて川を渡ったんです」。

老人は結局、猫の言うことを信じて最後にこう言った。

「猫が犬より頭がいいというのは本当だ。お前は箱を取り戻すことが出来たが、その間犬は別のことにかまけていた。これからは、犬が外にいて泥棒が来ないように見張り、猫のお前は家の中にいてよろしい」。

この日から、犬はいつも家の外にいて、猫は中にいるようになった。これが理由で、犬と猫は仲が悪いのだ。